

もう一つのお盆

例年になく暑い夏の盛りがどこまでも続きそうな今年のお盆。お盆とはお浄土からお迎えした御先祖様や新亡の靈に家族の元気な姿を見てもらって安心していただき、その靈を御供養する期間だということとはよくご存知のことだと思えます。ところで、宝塚のというより安倉のお盆と日本全国各地のお盆とは色々な習慣の違いがあり、驚かされることも多いものです。しかも、各地のお盆の様子を見ていくうちに今まで気付かなかったお盆の意味に気付かされるといふことも大変意義深いことだと思えます。

さて、私たちのお盆という言葉から連想するなかに、めでたい楽しいという感覚は盆踊りを除けばあまりないと思います。しかしながら、旧暦の八月にお盆を迎える関西と異なり、七月にお盆を迎える関東などの地方では、盆礼といって親族や知人の家を訪問して挨拶したり、進物を贈答することが行なわれます。これは正月の訪問、贈答を正月礼というのに対応する語で、一年の中間である盂蘭盆の時期にまたこれを行なうのです。七月十五日は中元といい、正月十五日は上元、十月十五日を下元というところから、盆礼を中元ともいうようになつたのです。

お盆は仏事で正月のように慶祝のおめでたいこととは違ふと思いがちですが、ところによつては、「結構なお盆でおめでとうございます」と挨拶します。初盆を凶事盆というのに対して、吉事盆と分類されます。盆礼をイキミタマ（生見玉、生身魂、生御魂）とかイキボンまたはショウボン（生盆）と呼ぶ地域は多く、盆礼が亡くなつた方のミタマをおまつりするのではなく、お元気で生きておられる親御様や親方の生きてゐるミタマをおまつりする意味が込められてゐるからそういうのです。つまり、親御様の無事を喜び、息災を祝う行事なのです。

初盆を除いて、前の年に不幸がなかつたお家ではお盆をむしろめでたい日と考えていたともいえます。盆の月の十三日は盆節句といたり、盆の年取りという地方が多いからです。長崎の五島では十四日は元日にあたるといつて鱈を用い、十五日には神棚に酒と魚を供えて飲み食いをするので、そのために盆魚釣りといつて漁に出ます。鱈を贈つたり食べたりする習慣は広く各地で見られます。

お盆は帰省シーズンで、松林寺の前の道路も車が数珠つなぎになります。しかし、子供や孫が親御様を囲んで無事を喜び、息災を祝い、お浄土からお帰りの御先祖様に子孫一同が元気でいる姿をご覧になつていただくことの喜びは、帰省ラッシュの疲れを吹き飛ばしてしまうでしょう。お盆には御家族そろつて御先祖様から受け継がれた永遠の生命に思いをはせ感謝いたしましょう。